集団宿泊活動の意義

校長　吉田　隆

十一月三十日、冬晴れの下、六年生は二か月延期となっていた修学旅行に出発しました。短期間で、子どもたちは目を見張る成長を遂げました。泊を伴う活動だからこそ得られる体験の重要性を実感した二泊三日でした。

一日目の夕刻、宿泊先のホテルで、一般のお客様から、「子どもたちの足音がうるさい」という苦情が寄せられました。子ども部屋の下階のお客様からの声でした。また、階段を上がる際のスリッパの音も指摘されました。

嬉しさで一杯の子どもたちです。元気に動きたくなるのは当然です。しかし、ホテル内は社会の一部。生活を共にする一員として、責任をもった行動が求められます。その日の班長会議でこのことを伝えると、子どもたちの行動はみるみる変わっていきました。

三日目にはホテルの責任者の方から、「修学旅行生がいるとは思えない」という一般のお客様からの声があったとお伝えいただきました。また、退館式には、部屋を整頓し、大荷物を持って集合しますが、一人の遅れもなく時間通りに開始できました。そこには、「新小しぐさ」の一つ、「時大事」を実行する子どもたちの姿がありました。

この自律的な姿は、二日目の班別研修（会津若松市内の自由活動）においても発揮されました。利用した複数のお店からは、「挨拶や礼儀が良く、このような六年生は初めてです」というお褒めの言葉を頂くほど。また、自律的な姿は活動班のチームワークにも表れ、想定外の事態にも、知恵を絞り仲間と支え合い、全ての班が時間内でゴールすることができました。

子どもたちの感想の一部です。

・お風呂やご飯の時間なども時計をしっかり見て、その場所に3分前には着けるようにしていました。しかし、早すぎると迷惑をかけてしまうので、そこの強弱が一番難しいと思いました。

・修学旅行に行ってやりきる力がつきました。私は学級班の班長として、班のメンバーがバラバラにならないようにあたりを見回しながら見学していました。班長としての役割と自分のめあてをやりきることができました。

・私が修学旅行で学んだことは、挨拶の大切さです。なぜなら、挨拶は人を喜ばせることができるからです。退館式でホテルの人に感謝され私も嬉しくなりました。

コロナ禍に屈することなく実施した修学旅行は、子どもたちにとって大きな成長と、掛け替えのない思い出を与えてくれたに違いありません。